

## プロローグ 感染症の歴史

人類は感染症との戦いに絶えず直面しながら、現在まで文明を発展させてきた。この構図は世界共通のもので、日本も例外ではない。感染症に苦しめられた長い歴史があった。それは現在進行形の歴史でもある。

感染症とは細菌やウイルスなどにより引き起こされる感染性の病気のことだ。それらのうち、人から人へなど、他の個体にうつるものがいわゆる伝染病である。疫病、流行病ともいう。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行を受けて、エンデミック、エピソードそしてパンデミックという言葉が耳にする機会が多くなった。エンデミックは、ある特定の地域内で感染者が日常的に発生する状況を指す用語である。風土病の流行がこれにあたる。感染者が急増加するとエピソードと呼ばれるようになり、地域、国、大陸を越えて世界的に感染者が増加する段階に入ると、パンデミックと呼ばれる。世界的に大流行してい

る新型コロナウイルスがこれにあてはまる。

島国の日本はパンデミックには巻き込まれにくい環境下に置かれていたが、距離的にも近い中国大陸や朝鮮半島との交流を背景に流行する事例は奈良時代からみられた。天平九年（七三七）に疱瘡（天然痘）が全国的に大流行して死者が続出したのはその一例である。

当時朝廷を牛耳っていた公卿の藤原武智麻呂、房前、宇合、麻呂のいわゆる藤原四兄弟（藤原〈中臣〉鎌足の孫）までもが命を落としました。

日本が感染症に苦しめられたのは、もちろん奈良時代だけではない。泰平の世と称される江戸時代も同様である。

江戸時代は初期と幕末を除いて戦乱こそなかったが、災害が頻発した時代だった。地震や火事のみならず風水害でも多数の犠牲者を出しているが、感染症の流行にも大いに苦しめられる。人口がゆうに百万を超えた巨大都市江戸は町人の人口密度がとりわけ高かったことから、その被害を最も受けやすかった。密集すればするほど感染しやすい。

疱瘡・麻疹・風邪（インフルエンザ）、そして幕末にはコレラのため多くの命が奪われた。なかでもコレラの惨禍は凄まじかった。死者が余りに多かったため、茶毘に付せない事態

となったほどだった。

しかし、不幸中の幸いというべきか、感染症の流行を背景とした都市崩壊のような事態は起きなかった。現代からみれば不充分さは否めないものの、幕府は医療政策だけでなく、現代でいう社会福祉政策にも力を入れたからである。

二〇二〇年の春から、日本でも新型コロナウイルスの感染者が急速に増えはじめた。ワクチンや特效薬もない恐怖感から、マスクがあつという間に品切れになるなどパニックに近い光景が現実のものとなり、医療崩壊という言葉もメディアを賑にぎわせた。

コロナ禍においては、日本最大の人口を抱える首都東京での感染者の動向が関心を集めている。東京は感染者が最も多く、人の行き来も激しいからである。

江戸時代に目を転じると、感染症の流行時に最も多くの感染者を出したのが、将軍のお膝元・江戸であった。

ワクチンや特效薬がない点では、江戸時代も現代もまったく同じである。つまり、コロナ禍により引き起こされた光景とは、江戸時代においてもみられたものだった。幕末のコ

レラ騒動に象徴されるように、江戸も感染症の流行時には大パニックに陥ったが、それだけではない。

感染を防ぐ一番の方法は人との接触を避けることである。江戸時代にも感染者の隔離や接触の制限などの対応が取られているが、上からの指示を待たずに感染防止のため日々の行動をみずから制限することもみられたことは想像するにたやすい。そうした「自粛」が流行の終息に大きな役割を果たしたことは言うまでもない。

その反面、とりわけ江戸で顕著だったはずだが、人が集まる銭湯、髪結床、遊郭吉原、あるいは料理屋や芝居小屋など盛り場では閑古鳥が鳴く。その結果、経済活動が停滞して景気が悪化し、生活困難に陥る者が続出する。これもまたコロナ禍でみられた光景であった。

このままでは社会が動揺し、江戸が都市崩壊に至るのは時間の問題だった。しかし、幕府の対応により最悪の事態は免れている。

いったい、幕府は感染症の流行が招いた社会の危機をどのようにして乗り切ったのか。コロナ禍に苦しむ現代人に示唆を与えてくれる教訓を、何か見出せるのではないか。

本書ではこのような問題意識のもと、江戸時代に流行した感染症（疱瘡・麻疹・インフルエンザ・コレラ）への幕府の対応策を通して、江戸が都市崩壊の危機をいかにして脱したのか、すなわち、感染症流行時にみせた江戸の危機管理術を解き明かしていく。

各章の内容は次のとおりである。

第一章「江戸の疫病と医療環境」では、感染すると死に至る確率が高かった疱瘡や麻疹に代表される疫病の感染状況とその医療実態を概観する。江戸の人々は病氣平癒のため祈禱<sup>とう</sup>などの行為に頼る傾向が強かったが、一方では薬害に苦しむほど薬の需要が高かった。

第二章「將軍徳川吉宗の医療改革と小石川養生所の設立」では、享保改革の立役者として知られる八代將軍徳川吉宗が医療改革にも力を入れた意外な姿に迫る。吉宗が目指した人命救助の象徴こそ小石川養生所の設立であった。

第三章「江戸町会所の『持続化給付金』」では、凶年に備えて穀物を貯<sup>たくわ</sup>えるため設立した江戸町会所が御救<sup>おすくい</sup>金や御救<sup>おすくい</sup>米の給付を大規模に繰り返すことで、江戸の都市崩壊を未然に防ぐ役割を果たした実相を明らかにする。幕府は感染症が流行した時にも町会所を

て御救金などを給付させたが、そこには悪化した経済状況を好転させたいという狙いが秘められていた。

第四章「幕末のコレラ騒動と攘夷運動の高揚」では、江戸だけでなく日本全国がパンニックに陥ったコレラ騒動を取り上げる。コレラを日本に持ち込んだのがアメリカ軍艦だったこともあり、一連のコレラ騒動は攘夷運動を高揚させる大きな要因となった。幕末の政情不安にも拍車がかかり、幕府は窮地に追い込まれる。

第五章「種痘の普及と蘭方医術の解禁」では、天然痘に苦しめられてきた日本が種痘の実施によりワクチンを得たことで、その撲滅に向けて歩みはじめた経緯を追う。蘭方医が種痘に成功したことで、幕府は東洋医学に代わって西洋医学を大いにバックアップするようになる。

エピソード「感染防止と経済活動の維持」では、明治政府との比較により幕府の感染症対策の歴史的意義を考察する。

以下、感染症の流行とその対策を通して、江戸の社会の知られざる一面に迫りたい。